



保健だよりでお知らせがあったように、高来先生とスクールカウンセラーの磯村先生による「こころのプロジェクト（ここプロ）」が始まりました。給食の時間に2人で教室に回って、心と身体のことについてお話をしてくれています。2日には1年生に「姿勢」について、8日には2年生に「五月病」についてのお話をしてくれました。給食を食べながら、楽しく学習ができる「ここプロ」。2人の先生が訪問してくれる日を楽しみに待っていてください。



2年生が山川町内在住の阿部保夫さんに、ご自身の戦争体験について講話をしていただきました。昭和19年9月に海軍の飛行予科練習生として松山海軍航空隊に入隊してから、終戦までに体験したことや、特攻隊として出撃する寸前だったことを聞かしてくれました。幼い頃から軍国主義の教育を受けて育てられると、何の疑いもなく戦地に向かってしまうということから、過去の教訓を忘れないでほしいとおっしゃっていました。沖縄での修学旅行で、さらに平和の尊さについて学んでみましょう。



今年も学級旗の作成が始まりました。左の写真は3年生の作成中の様子です。初めての1年生はどんな旗を作ってくれるのか楽しみです。

「よいドン！」大きなかけ声に誘われて、グラウンドに出てみると、3年生がスポーツテストで100m走をしていました。「校長先生も一緒に走りましょう。」と優しく誘っていただきましたが笑顔で丁重にお断りさせていただきます、シャッターを切りました。



そういえば、連休前にはシャトルランの後、校長室まで記録を報告してくれた人もいました。去年より体力がアップしたことを素直に喜んでいる様子が微笑ましかったです。



1年生は宿泊学習の時に班員が揃っていないとき、どう対応するのかを練習していました。来週からの宿泊学習、体調を整え、楽しく有意義なものにしてください。



## 私に戦争の話をさせてください 坂本ユミ子 第66回PHP賞受賞作

12年前、結婚30周年記念に夫と二泊三日で沖縄へ旅行した。写真で見たままの美しい海が私たちを迎えてくれた。夫は初めて、私は二度目の沖縄だった。

最終日の周遊バスツアーで行ったのは平和祈念公園。6月中旬だったが、すでに梅雨明けした沖縄は真夏の太陽が照りつけていた。添乗員さんはいたが、自由散策だった。

バスを降りたところで、20歳ぐらいの若い女性がツアー客に声をかけていた。無地の黒いTシャツに黒のジーンズ。パッと花が咲いたような笑顔で、「ボランティアでガイドをしている知念と申します。よろしければ案内いたします」と言った。私たちは知念さんに案内してもらうことにした。ほかのツアー客もほとんど知念さんについて行った。

ひと通り案内が済んだあと、知念さんがツアー客を集めた。「みなさん、私に時間をください。お話をさせてください。」私と夫は顔を見合わせた。この暑いのに嫌だなと思った。早くクーラーのきいたバスに戻りたかった。「暑い中、申し訳ありませんが、私に戦争の話をさせてください」

知念さんはまっすぐな目で私たちを見つめ、頭を下げた。私は急に自分が恥ずかしくなって、夫とうなずいていた。みんなで彼女を囲むように木陰の芝生に腰を下ろすと、彼女は話し始めた。「ここで戦争があった。米軍が上陸して地上戦になった。逃げ場を失った多くの人々が「バンザイ！」と叫びながら、美しい海に飛び降りて亡くなった。この公園は平和への願いを込めて作られた」—流れる汗をぬぐおうともせず、知念さんは30分も話し続けた。みんな無言で耳を傾けていた。

私は昭和32年、「もはや戦後ではない」と言われた時代に生まれた。中学生のとき、ジローズが歌う「戦争を知らない子どもたち」が流行った。戦争なんて遠い昔のことだ。自分には関係ないと思っていた。

初めて沖縄に行ったのは短大の卒業旅行だった。久米島のリゾートホテルに泊まった。無人島へ行ったりグラスボートに乗ったり、沖縄の海を満喫した。本島ではタクシーを一日借り切って、隠れた名所を観光した。ひめゆりの塔にも平和祈念公園にも行かなかった。仲よし4人グループの旅はただただ楽しかった。あのとき、私は知念さんと同じぐらいの年齢だった。

知念さんの話が終わったとき、だれも何も言わなかった。みんな立ち上がり、無言で海を見ていた。夫と私も海を見ていた。泣いている人もいた。私はここから飛び降りて亡くなった人たちに思いをはせた。

悔しかっただろう。悲しかっただろう。怖かっただろう。

ここで戦争があった。私が生まれる前、何十年も昔の話。知念さんの話は、初めて聞くことばかりだった。私は何も知らなかった。知ろうとしなかった。私には関係ないと思っていたから。今、ここで知れてよかった。多くの人々の命を飲み込んだ沖縄の海は、どこまでも美しかった。「今の気持ちを、忘れないでください」うしろで知念さんの声がした。

那覇空港に向かうバスの中で、一緒に話を聞いた添乗員さんに、「平和祈念公園では、知念さんのような戦争の話をするボランティアのガイドさんが多いのですか？」と尋ねた。

添乗員さんは「戦争経験者のボランティアさんが戦争を語ることがありますが、あんなに若い女性は初めてです。まるで沖縄戦でなくなった人々の魂が宿っているみたいでした」と教えてくれた。戦争体験がない若い知念さんが、なぜ戦争を語るのだろう。ここが沖縄だから？本人に聞けば良かったと後悔した。知念さんのことが一番の旅の思い出になった。

あれ以来、毎年6月になると平和祈念公園でのことを思い出す。どこまでも青く美しい海と知念さんの言葉を。「今の気持ちを、忘れないでください」—忘れてはいない。これからもきっと忘れないだろう。知念さんは今も沖縄を訪れる人たちに「戦争」と「平和」を語り続けているのだろう。

この先も日本の子どもたちが「戦争を知らない子どもたち」であり続けてほしいと願う。